



第8巻第1号  
通巻第85号

# 謹賀新年

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : [colors@go-karasu.com](mailto:colors@go-karasu.com)

新年あけましておめでとございませう。元旦になると、概ねこの手の挨拶を交わすわけである。今年も、そんな挨拶を幾度も交わしましたよ。対面だったり、電話だったり、メールだったり、葉書きだったりで。

大晦日から元旦に変わるといって、旧年から新年に変わること、零時零分零秒を跨いだということ、実際に何かが変わるのだから。そもそも、暦なんて仕組みは人間が手前の都合で考え出したものに過ぎないわけで、本質的には何も変わりはない。念の為に、我が家のばか猫に尋ねてみたけれど、勿論、いやあ、と答えましたよ。ごみ集積所で散らかし放題の鳥に尋ねてみたら、かあ、と答えましたよ。私は猫語も鳥語も解さないので、連中が何と返事をしたのか、正確にはわからないけれど、恐らく、俺様たちには、暮れも新年も関係ねえんだよ、と答えているのではないか。新年だ、めでたいねえ、などと浮かれているのは、人間だけであるし、人間の中でも唇に興味のない民族や個人は、こんなことに見向きをすることなく、当たり前の日を当たり前前に過ごしているのだらうなあ、と想像する。

いめでたい、と言いつつながら、杯を重ねるのは嫌いだ。いやいや、大きに結構。新年がめでたいのかどうかという理屈は置いておくとしても、私は挨拶肯定派。新年明けましておめでとございませう、と、喜んで頭を下げましょうと。

挨拶というものは、これは、新年に限ったものではない。朝、顔を合わせれば、おはよう。飯を喰う前には、いただきます。食べ終わったら、御馳走様。弱冠七歳の元康少年だって、社会の一員として、それなりにしっかりと挨拶行為をこなしている。こんなことは当たり前のことなんだよ、と私は思う。けれども、それは思い込みでしかない。猫や鳥に尋ねてみれば明々白々。こんなことを当たり前だと思っているのは、この広い宇宙の中の、ちっぽけな地球という星の中の、数多の生物の中の一つに過ぎぬ、脊椎動物門哺乳綱霊長目ヒト科の現生人類の中の、幾許かのものたちだけだろう。

近所の、ごく狭い道を歩いていたら、前方から見知らぬおばちゃんが出てくる。普通に歩いていては擦れ違つこともままならない。そんな折には、喜んで道を譲りますよ。それは自分の美意識のための行為でありますから、相手に何かを求めたりはしない。求めたりはしないけ

(最終面に続く)

からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

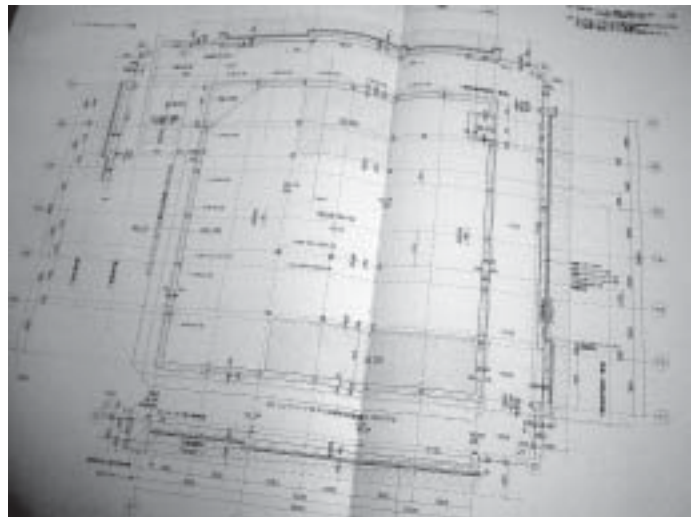
## 今日の紙面から

- 二面(ロンドンレポート) いただきます
- 三・四頁(書初め)
- 五・六頁(からすライブラリー)
- CD『大江戸出世小唄』
- 映画『ナルニア国物語』
- 七面(英語面) [horie.segaworld.com](http://horie.segaworld.com/)を見たか。

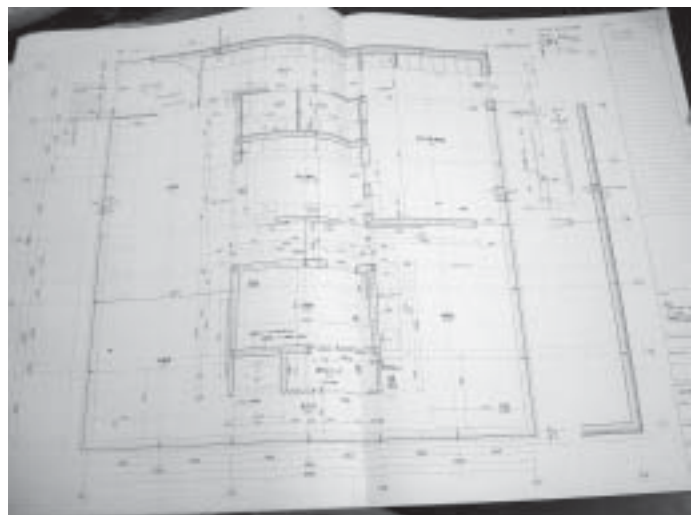




何よりも光が大事



何事も基礎が大事



いただきます

またまたインターネットからの話題。そう書いた瞬間に、自分の生活がどれだけインターネットに費やされているのかを考えさせられて、一瞬ドキッとしてしまう。けれども今はその事は置いておこう。実にシヨッキン

グなニュースをインターネットで読んでだ。それは永六輔のラジオで起こった論争。東京都内の男性からの手紙がきっかけ。ある小学校で母親が「給食の時間に、うちの子には『いただきます』と言わせないでほしい。給食費をちゃんと払っているんだから、言わなくていいではないか」と申し入れた、と言つもの。

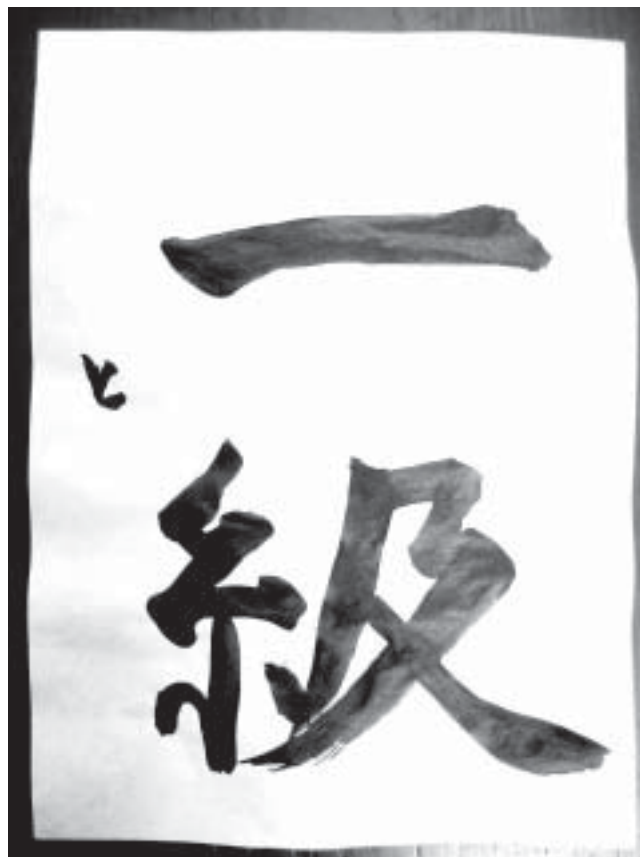
番組には数十通の反響があり多くは申し入れに否定的だった、と聞いて少し安心してしまふ。永六輔がラジオで「びっくりする手紙です」と紹介したように、僕もそれを読んでびっくりした。一方で、その母親のような考え方は必ずしも珍しくないことを示す体験談も。それは食堂で「いただきます」「ごちそうさま」を言ったら、隣りのおばさんに「何で」と言われたというもの。「作っている人に感謝している」と言つその人に対して、おばさんは「お金を払っているのだから、店がお客に感謝すべきだ」と言つ考え。いやはや、話し合う気にもなれないと言つか、あきれてしまふとはこの事だ。どうしてそうなってしまうのだろうか？ これは「お客様は神様です」の、日本の過剰とも言えるサービスから出て

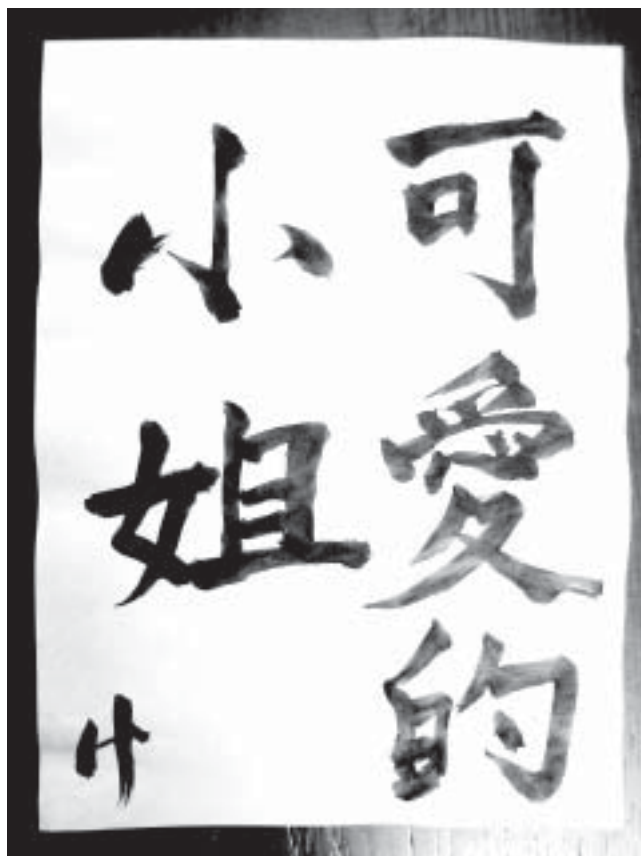
しまった膿なのだろうか？ 何処をどう間違えて「いただきます」が作ってくれた人や生命への感謝の気持ちを表す挨拶ではなく、お金に対する挨拶になつてしまふのか。

確かに僕は、レストランなどで食事をする時は「いただきます」と言わない時もある。それでも、それは「お金を払っているから」ではなくて、「言いづらから」だ。特に一人で食べていたりすると、何となく気恥ずかしくて言わない。にしたって店を出る時は「ごちそうさま」や「どうも」なんて挨拶を残して行くもんだ。それがきっかけでラーメン屋の親父と仲よくなつたりもする。それ以外で。

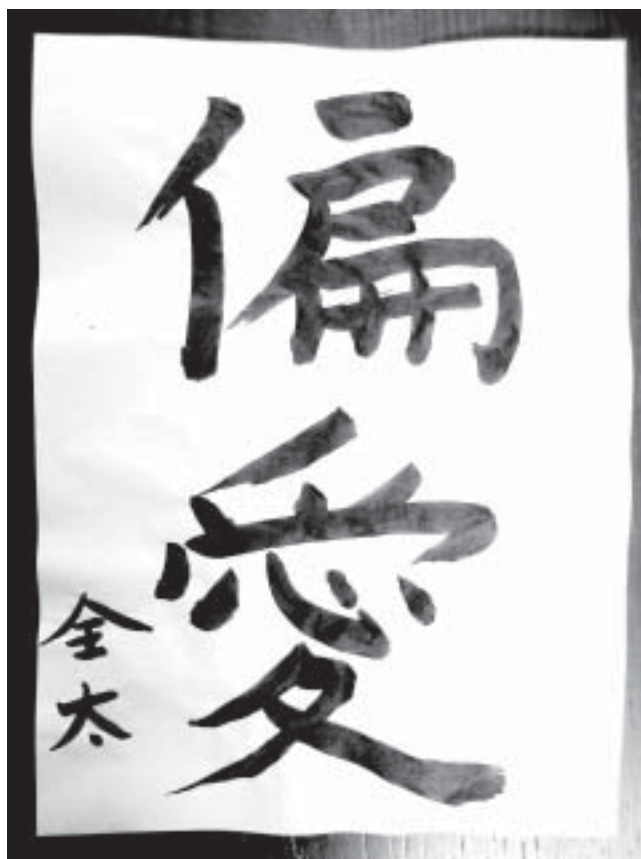
(神山)

書初め





書初め





## 大江戸出世小唄

うめ吉

OMAGATOKI、2005年、OMCA-1044

日本人の日本知らず。普段はそんなことを思いやしない。思わないどころか、外国映画に出てくる突拍子もない日本の光景、日本人の見てくれや立ち居振る舞いに、驚嘆爆笑したりしている。けれども、いざ自分が外国人と話したりしていると、ああ、私という人間は恥ずかしいほどに日本のことを知らん、抜け作、益暗、頓痴気、間抜け、安本丹のすつとこどつこいであるなあ、と赤面せざるを得ない場面に追い込まれることも屢々。例えば、能。例えば、歌舞伎。例えば、茶道。例えば、器。例えば、例えば、例えば……ってなもので、枚挙に暇がない。しかもさ、日本に来る外国人連中てえのは、そういうことに興味津々なわけですよ。結局、質問攻めにあう。無知蒙昧の私が口籠もって、うじうじむにやむにやしている、アレアレアレアレ、君トイウ人ハ、モシカシテ日本ノ文化ヲ知ランノカ。マジスカ。ソウイヤ、オカシイト思ツタ。ダヨ、丁髷ナイ、着物ナイ、MAYANNAI、デス。私ガイジン。ファッキュー、偽ジャック。本物ノ日本人ヲ連レテキヤガレ……な

どと舌打ち交じりに吐き捨てられたりするのである。仕方がない。外国人にもわかる日本文化で対抗するしかあるまい。今此処で死を以てお詫び致す、とHARAKIRIに及ぼうとする私であるが、ふと、気づくと、私は切腹というもののきちんとした為来り、所作なんざ知らない訳で、恥の上塗り……。

うめ吉という俗曲師。その声は、良く言えば透明で美しく、悪く言えば薄っぺら。その演奏は、良く言えばしっかり堅実だが、悪く言えば何が足りない。これでは悪口に聞こえてしまうかしら。これが正直な感想のだけれど、彼女には、従来の俗曲の枠を超えて、私のような日本文化素人を魅惑する何かがあるのは確かである。何だろうなあ、と繰り返し聴いているうちにすっかり病みつき。相当に入れ込んでいる私がいる。

ああ、差して一杯やりたいねえ。

(全太)



## ナルニア国物語 第一章 ライオンと魔女

### the Chronicles of Naruni “ the Lion, the Witch and the Wardrobe ”

2006年公開(アメリカ) ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ&ウォールデン・メディア

監督: アンドリュー・アダムソン 原作: C. S. ルイス

出演: ジョージ・ヘンリー、スキャンダー・ケインズ、ウィリアム・モズリー、アナ・ボブルウェル

「ロード・オブ・ザ・リング」(指輪物語)と双璧をなすといわれ、世界中で一億冊を売ったとの話もあるファンタジー小説の映画化、第一段。

ファンタジーといえば、「ネバー・エンディング・ストーリー」、前述の「指輪物語」や「ハリー・ポッター」シリーズが映画化され随分稼いでいる。当然ながらこの作品へも期待大といった所。監督は「シュレック」「シュレック・2」のアンドリュー・アダムソン。ディテールやクリエーター等のデザインは「ロード・オブ・ザ・リング」と同じリチャード・テイラーが担当。こういった特殊効果を多用する映画は新しければ新しいほど、リアルさを増していくようだ。そういえば「ネバー・エンディング・ストーリー」の白いドラゴンは張りぼてだったなあ……。

ストーリーは作者による所が大きいと思われるが、「指輪物語」が完全なファンタジー世界の中だけで完結していたのに対して、現代の(とはいえ、第二次世界大戦中という設定ではあるけれども)現実社会の人間がファンタジー世界へ迷い込むという決定的に違う起源を持っている。これは、地球なんてこれぼっちも出てこない「スターウォーズ」と、地球発が大前提の「スタートレック」との違いに近いのではないだろうか。無論、見る側の好みによって甲乙付けられる類いのものではないし、どちらもフィクションであるのは間違いないが、筆者は多少でも現実がリンクしているほうが感情移入しやすいと感じている。

子供向けと言ってしまうまでもだが、イイ大人にも熱狂的なファンが大勢居る事も厳然たる事実であるからして、子供騙しと言っ前に一度は観てみたらいかげんしょう。

(小張(寅僧))



# words for A Brash Guy

## Horie 彼を英語メディアはどう見たか

複数に跨って見受けられたのが brash。これが一般に共通する彼に対する形容ということなのだろう。

His brash style and unabashed pursuit of wealth had unleashed harsh criticism (Financial Times)

「彼のずうずうしいスタイルと恥ずかしげもない富の追求は、厳しい批判を招いた」

brash【形】ずうずうしい、向こう見ずな、がむしやらな  
unabashed【形】恥ずかしがらない、臆面もない

その過去。

Horie's rags-to-riches story of building an empire (AP)

「帝国を築き上げたホリエの立身出世物語」

rags-to-riches【形】無一文[貧乏]から大金持ちになった  
rag【名】ぼろ切れ、雑巾

その風貌。

the pudgy 33-year-old (Reuters)

「ずんぐりした33歳」

pudgy【形】太った、ずんぐりした

the unpretentious college dropout with spiky hair (AP)

「つんつん頭の気取らない大学中退者」

unpretentious【形】気取らない、見えを張らない  
spiky【形】先端のとがった、くぎのような

その態度。

he spoke the Tokyo youngster's cocky and blunt vernacular, scoffing at traditional business practices. (AP)

「彼は東京の若者たちが使う生意気で無愛想な仲間言葉を話し、伝統的なビジネス慣行をあざ笑った」

cocky【形】うぬぼれた、横柄な、なめた  
blunt【形】無愛想な、ぶっきらぼうな、きっぱり  
vernacular【名】土地の言葉、専門語、仲間言葉  
scoff【動】あざ笑う、あざける、小ばかにする

そのライフスタイル。

flashy lifestyle (Reuters)

「派手なライフスタイル」

flashy【形】派手な (flash「一瞬の光」)

his flamboyant lifestyle he drives a Ferrari and owns a private jet (Reuters)

「彼のきらびやかなライフスタイル フェラーリに乗り、自家用ジェットを所有」

flamboyant【形】きらびやかな、華々しい、燃えるような

その手法。

he shook up corporate Japan with his bare-knuckled business tactics (Reuters)

「彼は、なりふり構わぬビジネス手法で日本のビジネス界を揺さぶった」

bare-knuckled【形】容赦のない、なりふり構わない、素手で

その口癖。

he was the picture of cool, giving a snappy retort: "I expected that." (New York Times)

「当意即妙の返答“想定してました”は、彼はカッコよさの象徴であった」

snappy【形】快活な、粋な、しゃれた、格好いい

"within expectations," a phrase that Horie used often to brush off questions from the media (AP)

「ホリエがメディアからの質問をあしらうのに良く使ったフレーズ、“想定内”」

その現在。

as an underdog who made a fortune, Horie charmed many Japanese people (AP)

「財を為した敗北者ホリエに、多くの日本人は溜飲を下げた」

underdog【名】負け犬、敗北者、敗残者

(望月)

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。あなた一人で悩まないください。

相談無料  
秘密厳守  
関西方面  
にも強い



produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

4-3-49-1, Suginami-ku,

Tokyo 166-0015, JAPAN

voice : +81-5347-9063

facsimile : +81-5347-9064

(一面から続く)

れど、そのような場合、人たるもの、すみませんなねだとかありがとうなどという一言、あるいは、会釈などの、ささやかな挨拶をするものではないだろうか。少なくとも、この杉並ではそれが常識だと信じてきたけれど、近頃、私の常識が通用しなくなってきたようにある。道を譲っても、しれっと知らん顔で通り過ぎる人々。ごみ捨てやなんぞで早朝顔を合わせた際に、おはようございますと声をかけても、聞こえぬ体で外方を向く人々。前を歩く人の鞆から何か落ちたもので、拾って、落とし物ですよ、と差し出したところ、引いたくるが如き勢いで受け取り、無言で立ち去る人々。思わず、しやしやしやしやしきんと斬り捨てて、「いやな渡世だなあ」と市の口調で呟きたくなる私がいる。

しかし、この私の嘆く気持ちなど、毫も理解できぬ人々が世の中にはたくさんいるのである。堀江某や村上某のような金銭を基準とし

て生きる人々、あるいは、小泉某や、薮某のような手前勝手の勘違いを基準として生きる人々、そんな人々には私のこの落胆は全く伝わらないだろう。彼らの矮小な脳みそもわかるように、熱心に説いたとしても、悲しい哉、そんな法律に書いてないよね、などという返事がかえってきそうである。連中の発想にだって一理がない訳ではない。そんなのだ。そんなことは法律に書いてないのだから。だから、勿論、挨拶をしなくて罰せられることなどない。けれども、法律で明文化していなければ何をしてもかまわないのか、というところ、そんなこととはない。

御存知の方も少なくないだろうけれど、私はいかなりのサッカー好きである。私が数少ないその規則を習い覚えたときに、なるほどなあ、とつくづく思ったのは、「非紳士的行為(Ungentlemanly conduct)」という物謂いである。さすがは紳士のスポーツだ、とね。細かく書か

ないけれど、非紳士的行為をしちやいけませんよ、と。

ベツカムの悪童振りやフリーガンの乱暴狼藉、古くはキガンとヒリー・プレムナーの殴り合い(しかも、チャリティー・ゲームで)を引き合いに出すまでもなく、サッカー界隈にだって紳士とは程遠い人間が山のようにいる。それでも、非紳士的行為は慎むべし、ということに關して、誰からも異論は出ない。

日本国憲法に、第〇条として、非紳士的行為は断じて許さず、と付加してくれないものだろうか。半ば本気の冗談である。尤も、実現してしまつたら、それはそれで情けないかもしれませんなあ。

今更ながらではあるけれど、お天道様が見ているぜ、と悪党諸氏には申し上げたい今日この頃。

(全太)



## 万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

## bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事できるShotBarです。ビール、パーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。

木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。



Ken-ichi Shinozaki,  
architect

Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp  
篠崎健一アトリエ

### 編集後記

からす新聞第八巻一頁通巻第八五号、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇六年一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

**3771**

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451

宝仙寺  
ファミマ  
おうめかいどう  
中野坂上駅

**3771**